

# ヤスパーズ研究

## ——真理に対峙し哲学することの必要性和、その際の闘争と苦悩の意義——

文学研究科哲学専攻博士後期課程1年

中村 元紀

### 要旨

ニヒリズムの雰囲気は漂う、今日を生きる我々人間は、自分の内なる真理に対峙し超越すること、すなわち哲学することの必要性を認めながらも、その際に発生する闘争と苦悩を忌み嫌い、真理に対峙し哲学することから逃避し、刹那的な快楽を追い求めることを常としている。しかし、ヤスパーズはそれに対して、次のように警告する。真理に対峙し哲学することからの逃避が常態化すると、人間は大衆と化し、それにより詭弁家というニヒリズムと一体化した、無そのものである非真理的な人間存在が誕生し、その詭弁家が統治する全体主義という非真理的な国家形態によって、大衆化した人間は支配されることとなるが、その全体主義の中で、大衆化した人間は、人間本来の心の支えだった、自分の内なる真理を剥奪された後、単なる機能として扱われ、最後には詭弁家と同じ無そのものになる、と。そこで本稿では、ヤスパーズ哲学を用いて、真理に対峙し哲学することの必要性和、真理に対峙した際に発生する闘争と苦悩の意義について説くことを目的として、作成したものである。

### 目次

#### 序文

#### 第1章 ニヒリズムNihilismusから悟性信仰Verstandesglaubeへ

##### 第1節 『世界観の心理学』における人間の精神分析

##### 第2節 『現代の精神的状況』における時代精神の分析

#### 第2章 真理からの逃避により発生する非真理的なもの

##### 第1節 ニヒリズムと一体化した非真理的なもの、詭弁家Sophist

##### 第2節 人間を支配する非真理的なもの、全体主義Totalitarismus

## 序文

次のようなことは、今日を生きる現代人である我々にとっても、善なる行為であり、自明の出来事であると認知するところのものである。すなわちそれは、ニヒリズムNihilismusの現世において、自分の内なる真理Wahrheit（それは、自分の人生において果たすべき課題や目標であり、ヤスパーズの言葉を借りれば、人間の目指すべき本来性である超越者Transzendenz<sup>1</sup>ということにもなるが）に向かって超越すること、いわゆる、自分の内なる真理を求めて哲学することである。

そうした「思索の中で、自分自身を確かめることのできる、実存的存在確信は、もはや根源的に哲学的行為であるExistentielle Seinsgewißheit, die sich im Denken vergewissern möchte, ist ursprünglich schon ein philosophisches Tun (Ph. II S.260)」とあるように、ヤスパーズにとっての哲学することの意義とは、哲学することを通して、自分自身の力で、実存Existenzという本来的自己存在の確信を現実の内に実現することにある。

しかし、そうであったとしても、今日を生きる現代人の中には、真理を求めて哲学する際に発生する闘争Kampfや苦悩Leidenを忌み嫌うが故に、真理へと対峙しようとしないう者もいる。そのため、そうした人々は、哲学することなしに、目の前の刹那的な快楽を求めることに終始しがちである。さらに言えば、そうした人々は、あわよくば、真理に対峙して闘争することも、苦悩することもないままに、真理を獲得しようとするように思える。このように、今日の現代人は、自分の真理を求めて哲学することを善なる行為として認めながらも、その哲学することの必要性を感じていない。しかし、ヤスパーズによれば、自分の内なる真理へと超越すること、すなわち哲学することは必要不可欠なことであり、またそれからの逃避は自己欺瞞Selbsttäuschungなのであって、さらに言えば、自分の内なる真理からの逃避が常態化すると、人間は大衆Masse (GSZ S.33 usw.) と化し、そのことでもって、本来支配されることのない非真理的なものに、人間は結果支配されることになる、とヤスパーズは警告する<sup>2</sup>。

そこで本稿では、ヤスパーズ哲学を用いて、真理に対峙し哲学することの必要性と、真理に対峙した際に発生する闘争と苦悩の意義について説くことを目的として、論を展開していく。第1章・第2章の全容は、真理へと対峙し闘争することの意義を示すものになっており、一方で第3章の全容は、哲学することの必要性と、その際の苦悩の意義を示すものとなっていることを注記しておきたい。考察の手順は、目次の順序に従って進めていく。

## 第1章 ニヒリズムNihilismusから悟性信仰Verstandesglaubeへ

ヤスパースは『世界観の心理学*Psychologie der Weltanschauungen*』（以下、『心理学』）において、心理学の観点から精神分析を行い、それに基づいて、人間の精神類型を構築し、また『現代の精神的状況*Die geistige Situation der Zeit*』（以下、『現代』）において、当時の時代精神の分析を行い、それを通して、彼なりの時代批判を展開していった。後者が前者の応用であると鈴木が指摘したように<sup>3</sup>、これは前者で人間の内面性、いわゆる精神<sup>4</sup>を分析しながら、後者でその精神に基づく形で当時の人々の時代精神についての考察を展開していったものと考えられよう。こうしたことから、次のようなことが理解できる。それは、ヤスパースが当時の人々の精神を「ニヒリズムNihilismusから悟性信仰Verstandesglaube (GSZ S.140) へ」と向かうものとしてとらえていたということである。すなわち、ニヒリズムによって、自分の目指すべき内なる真理を見失った人間は、合理主義Rationalismus (PuW S.270) に基づく形で、即物的なものSachlichkeit (GSZ S.43 usw.)、いわゆる現存在Dasein<sup>5</sup>を求め、それを信仰するようになっていくということである。これは、今日の現代人の精神状況においても、共通する部分であると言える。

以下第1節・第2節において、『心理学』と『現代』の二つの著書を通して、ニヒリズムから悟性信仰へと向かう人間の精神について考察していく。

### 第1節 『世界観の心理学』における人間の精神分析

『心理学』は、人間の精神Geistがどのように変化し、進展していくかについて考察したものを、それを総括して精神類型として記した著作である。ヤスパースによれば、人間の生ける過程Der lebendige Prozeß、すなわち人生とは、客観的な世界観・価値観として実在する確固たる殻Gehäuse (PdW S.27 usw.) を身にまとい、それを心の支えHaltとして保持して生きながらも、限界状況Grenzsituation<sup>6</sup>によって、その殻は溶解せられて、それを契機として、新しい殻を求める、その繰り返しであるとしている<sup>7</sup>。その限界状況の際、心の支えである殻を失った人間は、懐疑主義SkeptizismusやニヒリズムNihilismusに陥り、何もかも疑わしく、現世に価値を見出せない、そうした状況に陥りながらも、新しい殻として、有限づけられたものの支えHalt im Begrenzten、あるいは無限なものの支えHalt im Unendlichenを求めていく。「A. 懐疑主義SkeptizismusやニヒリズムNihilismus」→「B.有限づけられたものの支え：殻Halt im Begrenzten: Gehäuse」→「C.無限なものの支えHalt im Unendlichen」という目次の構成順序からわかる通り<sup>8</sup>、最後に無限なものの支えを挙げていることから、ヤスパースとしては、ニヒリズムに陥ったとしても、無限なものの支えのうち生を見出すことが、人間のあるべき姿として見ていると言えよう。

しかし、人間はニヒリズムに陥ると、無限なものの支えよりも先に、有限づけられたものの支えを得ようとするものである。その考えが、後の『現代』における時代精神の批判へと

つながったものと論者は考える。考察の手順としては、人間がニヒリズムへと至る、その過程について考察した後で、その次に人間がニヒリズムから有限づけられたものの支えへと求める、その過程について、順を追って考察していこう。

ヤスパースは、人間がニヒリズムへと至る過程を次のように主張する。

もし、私が世界観から諸々の思惑を持ったり、その思惑を追い求めたりするならば、実現の際、実際の経験は根源的な見解と再三再四矛盾する。…（中略）…まさしく、一方で期待したり、他方で経験したりする具合に、意見が衝突したりする経験や意見が矛盾する経験こそ、生きるということである。こうした諸経験は、建設的な過程の中で進展し得るものだが、一方でこうした経験は各人を否定的なものの固執へと導き、その否定的なものは、諸々の判断の中で、〔次のように〕表現する。〔それは、〕あらゆる人間は無価値であるとか、私は無能で、非難されるべき存在であるとか、世界とは諸々の偶然による混沌なのだ、等々である。絶望は、魂の改鑄過程の源泉としてなることができる（宗教的な領域においては、回心、再生）。絶望はしかし、そのように固執したものとしては、ニヒリズムである。自己矛盾という例の常に更新される経験である絶望の中で、反省は行くべき道を見出そうと試みるが、しかしこうした絶望とともに、ニヒリズムへの過程は、いよいよもって促進していくのである。Wenn ich aus einer Weltanschauung heraus Absichten habe und verfolge, so widerspricht immer wieder der ursprünglichen Meinung die tatsächliche Erfahrung bei der Verwirklichung. ... Gerade die Erfahrung des Anstoßens, des Widersprechens von Meinung, Erwartung einerseits und Erfahrung andererseits, ist Leben. Diese Erfahrungen können in einem aufbauenden Prozeß fortschreiten oder aber jede dieser Erfahrungen führt zum Festhalten des Negativen daran, das sich in Urteilen ausdrückt wie: Alle Menschen sind nichts wert; ich bin unfähig, verwerflich; die Welt ist ein Chaos von Zufällen usw. Die Verzweiflung kann die Quelle eines seelischen Umschmelzungsprozesses werden (in der religiösen Sphäre: Bekerung, Wiedergeburt). Die Verzweiflung aber, als solche festgehalten, ist der Nihilismus. In der Verzweiflung jener immer erneuten Erfahrung des Sichwidersprechens sucht die Reflexion sich zurechtzufinden, doch mit dieser wird der Prozeß zum Nihilismus erst recht befördert.

〔 〕は論者の補足。(PdW S.253f.)

上記の内容について、順を追って説明して行こう。「状況－内－存在In-Situation-Sein (Ph. II S.203)」である我々人間は、二律背反Antinomieという限界状況の内に既に存在している。その状況下で人間は、世界観Weltanschauung（自分の心の内に思い描いている世界に対する見方）と、現実として実際に表れている世界の姿とがそれぞれ矛盾した状態を目的

当たりにする。その時、人間はこの不条理な現実に対して、絶望Verzweiflungを抱き、苦悩する。その絶望が、ヤスパースの主張する通り、回心Bekehrungや再生Wiedergeburtなどのような反省Reflexionの契機、いわゆる哲学することの契機となればいいのだが、そうとはならず、人間がその絶望に固執し続けるままであるならば、その人間はニヒリズムへと陥ってしまう。これが、人間のニヒリズム発生過程である。

そのニヒリズムによって、自分の内なる真理を見失った人間は、哲学することを放棄し、有限づけられたものの支えHalt im Begrenzten、すなわち可視的で確固として実在する殻に帰依するようになる。いまや「確固としたものや安らぎへと向かう、我々の内なる衝動は、あらゆるものを疑わしくし、あらゆるものを単なる有限なものとして克服させようとする過程に逆らうDen Prozessen, die alles in Frage stellen, die alles als ein bloß Endliches überwinden lassen, widerstrebt ein Drang in uns zum Festen und zur Ruhe (PdW S.269.)」のだ。というのも、自分の内なる真理に対峙し哲学する際に、それに伴う果てしない闘争と苦悩が存在し、それに疲弊した人間は、その解放を求め、有限づけられたものの支え、いわゆる殻という即物的なものSachlichkeitでもって、その解決を図ろうとしているためである。

あらゆる有限づけられたものの支えには、合理主義Rationalismusが共通して存在している (Vgl. PdW S.270)。「合理主義には、閉鎖的な世界像がつきものであるDem Rationalismus ist ein geschlossenes Weltbild zugehörig. (PdW S.274)」。すなわち、合理主義は、一つの完結した閉鎖的な世界像を絶対的な心の支えとして提供することで、二律背反という限界状況から回避しようとするものなのである。しかし、現世で生きる限り、人間はこの二律背反という限界状況から逃げることはできないのであって、そこには不可避的に「あれか—これかEntweder—Oder (PdW S.281)」というどちらか一方を選択しなくてはいけないという決断Entscheidが存在し、それに迫られるのが常である。その決断でもって、人間が実存的に自分の人生を全うしようとする姿こそ、ヤスパースの考える人間本来の姿と言えよう。しかし、それに反して、合理主義者は、その二律背反を度外視したままに、「あれも—これもsowohl als auch (PdW S.281)」という形で、二律背反の総合として矛盾を孕んだままの全体的なものを良しとするままで断固として譲らない。

そのため、「合理主義者は、一般的なものの中へと選択を先延ばしにするものだが、その選択とは、生き生きとしながら、ただまったくもって具体的に、また個人的に、また責任を伴った形で行われるものだDer Rationalist verschiebt die Wahl, die lebendig nur ganz konkret und individuell und verantwortlich stattfindet, in das Allgemeine (PdW S.278)」と言える。すなわち、そのようにして、合理主義者は、あれか—これかの決断を放棄することで、自分にとってのあるべき真理を求めて哲学することから逃避しているにすぎず、二律背反という限界状況に対する根本的な解決を与えているわけではないのである。なるほど、「合理化は、手元にある素材や、人間の前に閉鎖的な世界像を立てることを強奪したり、あ

るいは合理化は価値づけを掌握したり、生活態度を秩序づけたりするDie Rationalisierung bemächtigt sich des vorhandenen Materials, ein geschlossenes Weltbild vor den Menschen zu stellen oder sie erfaßt die Wertungen und regelt eine Lebensführung (PdW S.271)」ことによって、人間に対して客観的に確固として実在する即物的なものを、人間の心の支えとして提供するわけだが、その即物的なもの自体、そもそも有限なものであって、無常のものにすぎない。そのため、それを確固たるものとして、永遠に心の支えとして有することはできないのだ。

こうした合理主義に基づく形で作られた、有限づけられたものの支えは、結局のところ、本来的な状況として不可避的に存在している、二律背反という限界状況下において、あれか—これかという二律背反に対する決断をすることなしに、その二律背反を解決したと称して、その二律背反を止揚するaufheben形のままに、自らを絶対的なものとしながら、それに信仰するように働きかける「悟性信仰Verstandesglaube」<sup>9</sup>を人間に促すようなものであると言える。さらにこれは、ニヒリズムに陥りながらも、主体的に自分の内なる真理へと対峙し超越していくという人間のあるべき真理への態度を否定し、人間にその必要性を忘れさせて、人間を受動的に真理へと向けさせ、信仰させることで、人間を支配する全体主義Totalitarismusの様相を呈しているものだとも言えるのだ。

全体主義に関しては、本稿第2章において、改めて詳説することとして、以上の通り、『心理学』の中で、ニヒリズムから悟性信仰へと至る人間の精神を垣間見ることができた。これを踏襲する形で、時代精神の批判として描いた著作が、『現代』である。

## 第2節 『現代の精神的状況』における時代精神の分析

『現代』において、西洋人abendländische Mensch (GSZ S.17) が「*無の前に立っている vor dem Nichts stehen* (GSZ S.17)」状況にあると記すように、当時の西洋人（今日における我々の精神的状況も同じではあるが）は、ニヒリズムの時代に陥っている、とヤスパーズは、明言する。そしてヤスパーズによれば、人間は、その克服として、悟性信仰に基づく科学技術の信託によって出来上がった、有限づけられたものの支えによる秩序、すなわち現存秩序Daseinsordnung (GSZ S.30 usw.) を構築した<sup>10</sup>が、その影響で、自分の内なる真理へと超越しようとはせず、刹那的な快楽に溺れる人間、すなわち大衆Masseが発生し、今日では人間が大衆化していく時代へと変転していき、今に至るとする。これは、前節において論者が主張した通り、ニヒリズムから悟性信仰へと至る人間の精神を、当時の時代精神に当てはめることによって見出すことのできた、ヤスパーズ自身の時代精神の見方であると言える。このヤスパーズの時代精神の見方は、今日の社会情勢においても、十分に通用するものであると言えるが、果たしてどのようなものなのか。

まず、ヤスパーズは、西洋人がニヒリズムへと陥った際、世界から神を除外しEntgötterung

der Welt (GSZ S.20)、即物的なものSachlichkeit (GSZ S.43 usw.) を信仰する悟性信仰 Verstandesglaube (GSZ S.140) へと至った原因を、キリスト教Christentumの中に見出している。

キリスト教が普及する以前のインド、ギリシア、ローマにおける神話の世界では、確かに無信仰の懐疑家die glaubenslosen Skeptiker (GSZ S.20) が存在し、彼らが即物的なものを信仰するよう求めていただろうが、「事実、彼らにとっても、全体として靈性が与えられたままの世界Welt, die faktisch auch ihnen als Ganzes beseelt blieb (GSZ S.20)」が残っていた。しかし、キリスト教の影響で、「超世界的な創造神という着想が、創造として全世界を被造物へと変えたDie Konzeption des überweltlichen Schöpfergottes verwandelte die gesamte Welt als Schöpfung zur Kreatur (GSZ S.20)」。すなわち、現世におけるあらゆる存在は、すべて神の創造物なのであり、その証明として、科学でもって合理的に証明する必要が出てきたのである。そしてその後、ニヒリズムにより、西洋人の間にキリスト教へと帰依する信仰がなくなった際、西洋人の特性である合理主義だけが先行してしまい、西洋人の心の中に悟性信仰だけが残ったのである<sup>11</sup>。そして、ニヒリズムの克服のために、その悟性信仰に基づき構築された現存在秩序へと当時の人々は邁進していたのだ。こうしたことから、宗教→科学→技術という遍歴をへて<sup>12</sup>、西洋人は、ニヒリズムから悟性信仰へと至り、技術に対する信頼に基づいた形で現存在秩序を形成し、今に至るといことが、ヤスパースの考える『現代』における当時の時代精神である。

そしていまや、こうした西洋人は次のようなことを考える。

現存在が今日、技術的発明に基づく、合理的な生産における大衆の生活保障として、見なされていることは、あらゆる人に知れ渡ってしまうほど自明のことである。それは、あたかも悟性を通しての全体だけが、完全な秩序をもたらされうるかのようである。

Dasein ist heute mit einer allverbreiteten Selbstverständlichkeit gesehen als Massenversorgung in rationaler Produktion auf Grund technischer Erfindungen. Es ist, als ob das Ganze durch Verstand allein zu vollendeter Ordnung zu bringen wäre.

(GSZ S.31)

しかし、そのように形成された現存在秩序は、永遠のものではなく、結局のところ陳腐化し、滅びゆくものにすぎない。したがって、この現存在秩序は、西洋人が見出した、ニヒリズム克服のための完全なる心の支えとして、存立しえないものなのだ。悟性Verstandという人間の持つ合理的な能力で、完全な秩序を形成しようとしても、所詮不可能なことなのである。

また、そうした現存在秩序は、その内に住まう人間に対して、大きな弊害をもたらしている。例えば、次のような例が挙げられる。「個人は、機能の中へと解消するDas Individuum

ist aufgelöst in Funktion (GSZ S.43)」、「人間存在は、一般的なものに還元される。すなわち、作業能力のある身体性としての生命力に、また享樂の通俗さに還元される*Das Menschen wird reduziert auf das Allgemeine: auf Vitalität als leistungsfähige Körperlichkeit, auf die Trivialität des Genießens (GSZ S.43)*」等々。そこには人間としての個性や尊嚴などなく、存在するのは、有益な道具としての、もしくは機能としての人間のみである。もはや「人間は、手段であるだけで、目的ではなく、いわんや意味であるべきものでもないことにまで上り詰めていることの内に存在するかのようである*Der Mensch scheint in das aufzugehen, was nur Mittel, nicht Zweck, geschweige Sinn sein sollte (GSZ S.72f.)*」。

ではなぜ、現存在秩序が形成されると、人間は機能的な存在として扱われ、人格を剥奪されることとなるのか。金子によれば、近代ヨーロッパ精神の特徴である自己意識は、人間を人格として扱う他己意識と、人間を事物として扱う対象意識とがあるが、科学と技術とによって、人間生活の向上を行うために、まず他己意識よりも対象意識を優先させ、対象物の発展を行い、それによって、人間が他己意識とつながりあうようになるため、人間に対しても、対象意識が優先的に働くのだと述べる<sup>13</sup>。この金子の見解は、あながち間違っておらず、むしろヤスパースの見解に近いものと思える。よって、現存在秩序の形成の中で、人間の対象意識にしたがって、人間は機能的な存在として評され、機能として扱われてしまうのだ。

そして、機能と化した人間は、大衆*Masse*と化し、ひたすら自分の与えられた仕事に従事し、自分の意志がないままに、それを忠実に遂行することのみ、善として認められた存在となる。すなわち、大衆は「機器*Apparat (GSZ S.45)*」という技術によって生み出された産物に追従する形で、それに支配された存在であると言えよう。そのように、機器に支配されてしまうと、大衆は自分の身の振り方をも反省する間もなくなってしまい、遂には自分の存在に対して、無関心になる。これにより、大衆は自分について反省すること、つまりは自分の内なる真理へと対峙し哲学することを諦めてしまい、機器の提供する有益性と利便性という恩恵に心奪われ、それに享受するようになる。真理探究をしなくなった大衆は、それによる闘争や苦悩、不安*Angst*から回避することができ、享樂的な人生を送ることができたと言えるにしても、結果として、自分の存在を忘却し、それによって機器の奴隷と化す事態へと陥ってしまうのだ。「もし人間が大衆としてそこに存在しているならば、人間は大衆の中においても、もはや人間そのものではない*Der Mensch ist, wenn er als Masse da ist, doch in der Masse nicht mehr er selbst (GSZ S.36)*」。

しかし、「人間は大衆から決して逃れられない*niemals entrinnt er [=Mensch] ihr [=Masse]*」(□は論者の補足。GSZ S.37)なのであって、あらゆる人間が不可避的に機器に支配され、大衆と化す、今日はそうした機器と大衆による時代なのだ、とヤスパースは主張するのだ。この主張は、今日の社会情勢を見ても、どこか通ずるところがあるとみていいだ

ろう。

ここまでの内容について、次のように総括することができよう。ヤスパースは、当時の時代状況をニヒリズムの状況下で発生した機器と大衆の時代としてとらえる。機器は二律背反という限界状況を隠蔽したままに、大衆に対して、享楽を提供することで、ニヒリズムを解決しようとし、その見返りとして、機能として従事し、服従するように働きかけるものである。その機器によって支配された大衆は、機器の提供する享楽に踊らされて、自分について反省する機会を失ってしまう。そのように、自分の内なる真理を求めて、哲学する機会を失った大衆は、自分の存在を忘却し、機器の奴隷へと成り下がってしまう。そうした自分の内なる真理を求めて哲学することなく、快楽に溺れる大衆の時代精神が見受けられると、ヤスパースは主張するのだ。

こうしたことから、大衆と化した人間は、自分の内なる真理から逃避し、悟性信仰に従って、即物的なものを現世において求めて、ニヒリズムを解消しようとする。こうした人間は、ニヒリズムと一体化して、無Nichtsそのものになった非真理的なものである「詭弁家Sophist」に成り下がったうえで、「全体主義Totalitarismus」を用いて、あらゆるものを自分の手中に収め、支配しようとする。そのようにして、人間が真理から逃避することで、そうした非真理的な存在が発生し、それが結果として、人間を支配していく存在になっていくわけだが、果たしてどのようなものなのか。次章において詳説を行う。

## 第2章 真理からの逃避により発生する非真理的なもの

### 第1節 ニヒリズムと一体化した非真理的なもの、詭弁家Sophist

本節では、『心理学』、『現代』を主な資料として用いながら、詭弁家Sophistの特性とはいかなるものであるのかについて論じていく。

『心理学』において、人間がニヒリズムと一体化となるder Mensch mit dem Nihilismus einig wird (PdW S.261) というニヒリズムの形態の一例として、ヤスパースは詭弁家Sophistを挙げているが、その特徴は以下の通りである。

人間は、あらゆるニヒリズム的な話や決まり文句に反して、自分の中で揺るがない。… (中略) …人間は、ニヒリズムの全領域を把握し、それを自分のものにする。しかし、その領域は人間にとって手段である。人間は無条件に自身の衝動によって支配されており、人間は決して自分の存在を拒否しようとはせず、人間は感覚的な享楽という領域の中に、また権力と威信をめぐる格闘の領域の中に存在するままである。

Der Mensch ist ganz sicher in sich trotz aller nihilistischen Reden und Formeln. … Er [=Der Mensch] hat die ganze Sphäre des Nihilismus begriffen und sich zu eigen gemacht. Aber sie ist ihm Mittel. Der Mensch ist unbedingt von seinen Trieben

beherrscht, er will sich nichts versagen, er bleibt in der Sphäre des sinnlichen Genießens und des Ringens um Macht und Geltung.

〔 〕は筆者の補足。(PdW S.261)

詭弁家とは、ニヒリズムをものともせず、むしろそのニヒリズムを手段として利用していきながら、自分の欲望のために、他者から即物的なものを奪取し続けることで、自己存在Selbstseinを保持し、拡張していこうとする不誠実な存在であると、ヤスパースは定義する。

このように、ニヒリズムと一体化した詭弁家は、もはや自己存在Selbstseinではなく、むしろ無Nichtsそのものであると言える。なぜ、そのように言えるのか。つまり、有限づけられたものの支え、いわゆる現存在を求め、それを保持し続けようとする詭弁家は、そのままその現存在を基礎に置きながら、自己生成していくことで、自己存在の確立を果たすことができるため、無にはならないのではないのか、そうした疑問が出てくることであろう。それについて詳説すると、以下の通りである。

詭弁家は、現存在Daseinと求めると言うが、「現存在は、それ自体において常に不完全なものであり、またそうであって、絶えず新しい形態へと自らを駆り立てていくDas Dasein, stets in sich unvollendet und wie es ist, unerträglich, treibt sich zu immer neuen Gestalten hervor (GSZ S.63)」ものであるため、現存在をいくら求めようとも、結局のところ陳腐化していき、消失していく。そのため、詭弁家は再び新しい現存在を求め続ける羽目となる。この詭弁家の生き方は、刹那的であり、実存という本来的な自己存在の確信を目指す生き方ではない。とどのつまり、それは詭弁家自体、無であるからにほかならない。それだからこそ、詭弁家は「外見上、もっとも自然な形で自明のものとして存在するように見えても、詭弁家そのものは、決してそこには存在していないIn scheinbar natürlichster Selbstverständlichkeit ist er [=Sophist] doch *nie selbst da* (〔 〕は論者の補足。GSZ S.155)」とすることができよう。

また、詭弁家の精神の内には、道具の精神der Geist als Mittel (GSZ S.72) が宿っている。ヤスパースは、次のようなことを述べる。

精神は自分の根源として、もはや自分自身を信じない。精神は、道具になるのだ。そのようにして、〔精神は〕詭弁への完璧なほどの移ろいやすさの中で生成され、精神はあらゆる主人に仕えることができるのだ。

Der Geist glaubt nicht mehr sich selbst, als eigenem Ursprung; er macht sich zum Mittel. So in vollkommener Beweglichkeit zur Sophistik geworden, kann er jedem Herrn dienen.

〔 〕は論者の補足。(GSZ S.72)

その精神は、自分の自由Freiheitに基づく意志Willeによる、あれか—これかの決断Entscheidでもって、自己存在としての生を全うしようとする自律的な精神なのではない。道具としての精神は、むしろ有限づけられたものの支えを保障すること、すなわち現存在扶養Daseinsfürsorge (GSZ S.158) のためならば、あらゆるものを手段として扱って、あらゆるものを自分の支配下に置こうとしながらも、いざ自分より強いものがあらわれると、それに立ち向かうことなく、その従者となって、媚びを売ること、現存在扶養を得ようとする奴隷精神である。この奴隷精神があるからこそ、他者から現存在という有限づけられたものの支えや、人間の精神の内なる無限なものの支えを奪取することを厭わず、恥とも思わないのだ。というのも、その奴隷精神による行動は、自分の意志によるものではなく、自分の欲望によるものであって、その欲望の内には、自由意志による決断が存在しないため、無自覚的な行動であると言えるからだ。

さらに言えば、この道具としての精神は、自律的に行動しようとせず、むしろ他律的に行動しようとしているために、自己存在に対して不誠実な精神であり、自分の向かうべき真理に対峙し、超越しようとせずに、むしろ真理から逃避しようとしているために、真理に対しても不誠実な精神であると言える。そのため、この精神でもって、実存へと向かう、真なる自己生成は不可能であり、むしろ誤った自己生成を導く精神なのである。

以上のことから、詭弁家は自己存在の不在の、無性格なcharakterlos (GSZ S.156) 存在なのであり、かつニヒリズムと一体化した、無そのものなのであって、道具としての精神に従って、あらゆる手段を用いて、他者から現存在や精神を奪取していき、結果として、他者を無にしていく、無責任かつ不誠実な存在であると言えよう。

加えて、詭弁家は反理性Widervernunft (VWZ S.55) という存在であるとも言える。ヤスパースは次のようなことを述べる。

自己存在である敵対者が詭弁家に対して、やってくる場合、すなわち彼に対して、知性そのものでなく、むしろ体現している存在の媒介がやってくる場合、彼は際限なく動揺するようになる〔以下省略〕。

Wo ihm [=Sophist] ein selbstseiender Gegner kommt, dem Intellektualität nicht an sich, sondern Medium erscheinenden Seins ist, wird er *grenzenlos beweglich*; …

〔〕は論者の補足。(GSZ S.156)

上記の引用では、以下のことが示されている。それは、詭弁家が実存という本来的な自己存在に出会うと、詭弁家そのものの存在が根底から揺るがされ、極めつきは、詭弁家そのものの存在が消失することになりかねないため、この実存的な存在に反して、詭弁家は自分の存在の保持のために自己弁護を行うということである。

そうした実存的な存在は、自分の内なる真理と対峙し、そこへと超越していく、すなわち真理を求めて哲学する存在である。真理を求めて哲学する際、実存的な存在は、他者との交わりKommunikationを欲しており、それでもって他者とともに自分の内なる真理を求めて哲学することで、ともに自己生成へと邁進していくのである。そのため、真理へと至る、その「途上にいる存在Auf-dem-Weg-Sein (EP. S.13)」として自覚している実存という本来的な自己存在は、自分を絶対的な存在として認めず、理性Vernunftでもって、自分のありのままの姿を、自分とは異質の存在である他者の前にさらけ出し、「あらわになることOffenbarwerden (Ph. II S.64)」によって、互いに自分の内なる真理の生成、さらには互いに自己生成へと向かうことができるのだ。以上のことを、斎藤は、哲学することの根源であり、また主体的真理である愛Liebeが、その愛の性質である結合と分離を理性でもって作用すること、また他者へと向かい実現化していくことで、自他ともに実存的に自己生成することができる、と解説している<sup>14</sup>が、まさに当を得た解説であると言えよう。

これに対して、詭弁家は、常に自分を絶対的な存在であると信じて疑わず、それを固持するため、自分に同調するもののみを受け入れる一方で、自分に反発する異質な存在については排除していく性格を持った存在である。したがって、詭弁家は異質な他者を排除していき、自分に同調する存在のみを自分の内に受け入れる閉鎖的な構造を持った反理性であるということが言える。

さらに言えば、詭弁家は普遍的に潜伏する不可解なものと定義することも可能である。道具としての精神を有していれば、その存在はすべて詭弁家となるのであって、大衆の内に道具としての精神が浸透していくと、その大衆を通して、詭弁家は普遍的な存在として現前するようになる。また、この道具としての精神は、今日普遍的なものとして存在することが自明の事態になっているため、これを異質なものとして発見しづらばかりか、さらには現世のあらゆる存在の内に隠れ潜んでいるため、その本性があらわれるまでは、容易に理解しがたいものである。そして、その道具としての精神の言動が、現に形としてあらわれたとしても、その欲望のままに突き進む一貫性のかけた言動はどこかとらえどころがなく、不可解なものであるため、やはり容易に理解し得るものではない。よって、以上のことから詭弁家は普遍的に潜伏する不可解なものと定義しえるのだ。

以上がすべて詭弁家の特性である。要約すると、「a) 欺瞞に満ちた無そのもの」、「b) 反理性」、「c) 普遍的に潜伏する不可解なもの」という特性が、それぞれ見受けられた。

ちなみに言うなれば、詭弁家の特性と全体主義Totalitarismusの特性は非常に似ているものが多く、その特性の合致点の多さから、ヤスパースは、詭弁家によって全体主義という国家形態が成立すると考えたのではないかと論者は推測する。では、詭弁家によって全体主義という国家形態が成立したと言うなれば、その全体主義とは、いったいどういったものなのであろうか。

以上の考察を踏まえて、次節では上記の詭弁家の特性と比較する形で、全体主義の特性についての考察を行っていく。

## 第2節 人間を支配する非真理的なもの、全体主義Totalitarismus

本節では、『現代』、『自由と権威*Freiheit und Autorität*』、『全体主義との闘いにおいて*Im Kampf mit dem Totalitarismus*』、『現代における理性と反理性*Vernunft und Wiedervernunft in unserer Zeit*』（以下、『反理性』）を主な資料として用い、前節の最後に挙げた、詭弁家の特性と比較しながら、全体主義の特性について考察していく。

### a) 欺瞞に満ちた無そのもの

詭弁家は、ニヒリズムと一体化した存在、すなわち無なのであって、そのために、あらゆる手段を使って、他者をだますことで、他者から現存在という有限づけられたものの支えや人間の精神の内にある、無限なものの支えを奪取することで成長していく存在であると、前節において、そのように定義した。この特性は、全体主義が人間を大衆化させたいうえで、人間を無にすることによって人間を支配していく過程と非常によく似ている。

では、どのようにして、全体主義は大衆化した人間を支配し、その結果人間を無にするのかについて論述していこう。

ヤスパースは、全体主義が人間を支配していく過程を、自己喪失・欺瞞・不安<sup>15</sup>という全体主義の原理にしたがって、進行していくものだと主張する。まず自己喪失と欺瞞について、ヤスパースは、次のように述べる。

全体主義の基底は、実体的な内実の結びつきを途方もない現存在へと解消することであり、その現存在は、無の内にただ確固としたもの一般を、また無秩序状態の内に秩序一般を盲目的に切望するものである。全体主義は、そのあとで自らを救済として提供するために、こうした解消を促進する。

Der Boden des Totalitarismus ist die Auflösung der Bindungen an substantielle Gehalte zu einem ratlosen Dasein, das im Nichts nur ein Festes überhaupt, in der Anarchie nur eine Ordnung überhaupt blind begehrt. Der Totalitarismus fördert diese Auflösung, um dann sich als Rettung anzubieten. (PuW S.83: in IKT)

すなわち、全体主義とは、人間から、実体的な内実の結びつき、いわゆる無限なものとしての支えである、人間の精神を剥奪していくことで、人間を単なる現存在、いわゆる即物的なものへと零落させながら、その代わりに新たな心の支えとして、即物的なものを提供する、その救世主として、大衆の前に降臨し、自らを崇拜するように仕向けることで、人間を大衆

化させていき、結果として、人間を無に化す、欺瞞に満ちた国家形態であると、ヤスパースは述べているのだ。このようにして、全体主義は、人間から精神を奪うことで、人間の自己喪失化を図り、それにより人間を大衆へと零落させる欺瞞によって、人間を支配していくのだ。

全体主義にとって、ニヒリズムの最中において、人間の自己喪失を図ることは、お手の物である。というのも、ニヒリズムの時代に陥っている人間は、無限なものの支えを求めて、哲学することを放棄し、ニヒリズム克服のために掲げた悟性信仰に従う形で形成された科学技術まみれの現存在秩序の中で、生活することに安んじたままであるからだ。その秩序の中では、「結びつきの解消は、技術を通して現存在が変化したことで成り立った世界全体において、生じるDie Auflösung der Bindungen geschieht auf der ganzen Welt infolge der Daseinsverwandlungen durch die Technik (PuW S.83: in IKT)」現象として、日常茶飯事のこととなってしまっている。そのように、悟性信仰に従って、有限づけられたものの支えのみを是認していく世界の中では、実体的な内実の結びつき、いわゆる無限なものとしての支えを見出していくことは難しい。

では、その無限なものの支え、いわゆる、「こうした存在の内実はどこから生じるのか。それは、歴史的な伝承を通して、あらゆる事物の根拠である、超越者に関係づけられているWoher kommt dieser Seinsgehalt? Er ist durch die geschichtliche Überlieferung bezogen auf den Grund aller Dinge, auf die Transzendenz (PuW S.44: in FA)」とヤスパースは答える。すなわち、無限なものの支えとは、真なる権威Autoritätとして存在する、超越者Transzendenzのことを指し、これがヤスパースの目指すべき真理として挙げられているものである（これについての詳説は、次章にて行う）。

さらに、上記の引用文に、「歴史的な伝承を通してdurch die geschichtliche Überlieferung」とあるが、これはヤスパース哲学の概念で言うならば、「歴史性Geschichtlichkeit」に当たる部分だと考えられる。斎藤の解説を引用して説明するならば、「歴史をもつということは、集団（社会）の一員として集団の時の流れのなかにあつて、ただその流れの必然性に支配されるものではなくて、その必然性のなかにあつて、必然性を超えて永遠に触れる（永遠に価値あるものを見つけたり、創り出したりする）可能性をもつもの」<sup>16</sup>が、歴史性であるとしている。言うならば、超越者という人間が目指すべき真理をつなぎとめる、実体的な内実の結びつきであると言うことができる。

要するに、自己喪失とは、人間の有する歴史性という無限なものの支えである超越者との結びつきを失うことであり、全体主義は、その自己喪失によって支えを失った人間に近づき、自分の信奉者になるように欺瞞を施すのである。

そのようにして、三つある全体主義の原理のうち、自己喪失と欺瞞の二つを行うことによって、全体主義は、大衆化した人間を自分の支配下に置く。しかし、全体主義は、それだけ

にとどまらず、不安という原理を用いて、自分の支配を強化しようとする。その全体主義の不安という原理こそ、詭弁家の特性における「b) 反理性」と相通ずるものではないかと、論者は考えるのである。以下、反理性的な作用をもたらす不安についての詳説を行う。

#### b) 反理性

全体主義は、「他者を支配するための不安」と、「全体主義そのものが抱く不安」の二つの不安の原理を有している<sup>17</sup>。

まず一方の不安の原理である、「他者を支配するための不安」の原理について、ヤスパースは、次のように述べる。

全体主義の原理とは、不安であり、起こり得る諸々の不都合さに対する不安から始まり、次いで諸々の脅迫に対する不安となり、そして暴力行為や〔徹底的な〕破壊に対する不安となる。

Ein Prinzip des Totalitarismus ist die Angst, beginnend mit der Angst vor möglichen Unannehmlichkeiten, dann vor Drohungen, vor der Gewaltsamkeit und der Vernichtung.

〔 〕は論者の補足。(PuW S.87: in IKT)

大衆化した人間は、自分の自由意志を放棄し、それによる自分の内なる真理へと超越することから逃避し、欲望のままに有限づけられたものの支えを盲目的に求め続ける存在である。そのように自分の自由意志を放棄した大衆は、有限づけられたものの支えである全体主義を信頼しきって、それに自分の身をすべて丸投げにする。すると、全体主義は、そのようにして大衆が、自由意志を発動しないことを好機とみて、徐々に大衆に圧制をかけていく。大衆は、その全体主義の圧制にどこか圧迫感を感じながらも、自分の自由意志を放棄したまま、その自由意志を発動することなく、事の成り行きをただ漠然と眺めて、どうにかなるという日和見主義的に人生を送ることをよしとして、全体主義の圧制に対して何ら反発することも無い。そうすると、全体主義はいよいよ大衆を単なる機能として利用することを始め、事の次第は、気付けば取り返しのつかないところにまで進展していくことになるのだ。

このように、「不安は、全体主義の方へと流されていくことになる。その不安は、嫌疑という方法を通して、助長されることとなるDie Angst wird die Zutreiberin zum Totalitarismus. Sie wird gefördert durch die Methode des Verdachtes. (PuW S.88: in IKT)」。このようにして、全体主義は大衆を不安がらせることによって、大衆の全体主義に対する服従を絶対的なものとするのだ<sup>18</sup>。

そして、「最後は、あらゆるものに反してあらゆるものに信頼を置かないDas Ende ist das Mißtrauen aller gegen alle (PuW S.88: in IKT)」事態へと、大衆は滑り落ちてしまう。

大衆は、全体主義の圧制により、さらに機能として扱われるようになり、自分を一人の人間として扱ってくれるものはどこにもないと感じて、あらゆる他者に対する不信感を抱くようになる。さらに言えば、他者の存在に対する不信感が、他者を攻撃する形で反発する状態へと向かっていくなれば、まだ大衆の自由意志は残っているが、逆に他者に反発することなく、受け入れるような状態へと向かっていくと、大衆は自分に対する不信へと陥って、自分の自由意志を放棄するようになる。すると、全体主義が大衆を機能として扱うような現状の打開自体も諦め、ただ唯々諾々と機能として扱われることに慣れてしまった大衆は、自分の存在を無へと帰する結果となる。このようにして、全体主義のもたらす不安は、大衆に対して全体主義の服従を強化したうえで、最後に大衆を無そのものにさせる効果があるのだ。

また他方の「全体主義そのものが抱く不安」の原理とは、全体主義が閉鎖的かつ反理性的な存在であることを証明するものである。というのも、全体主義という「誤った権威は、交わりを打ち切り、自分自身にしか興味を持たず、ある一つの独占的な真理を持っていると思ひ込み、見せかけで他の権威と語り合い、ただ自分の真理を広めようとするのみである Falsche Autorität bricht Kommunikation ab, hat Interesse nur für sich selbst, weiß sich im Besitz der Wahrheit, der einen ausschließlichen, redet mit anderen zum Schein, will nur ihre Wahrheit verbreiten (PuW S.58: in FA)」からだ。

では、なぜそのように、全体主義は、閉鎖的かつ反理性的なのか。その理由として、全体主義は、他者との交わりによって、確固としてきた自分の存在が動揺し、結果消失することに対して、不安を抱いていることが挙げられる。またもう一つの理由として、暴力Gewaltと戦争Krieg (PuW S.58: in FA) でもって人間を受動的に全体主義へと向わせるような方法でしか、全体主義は人間を支配することができないため、その支配体制の保持を目的として、全体主義が閉鎖的かつ反理性的になることが挙げられる。

以上、こうした二つの不安の原理から、全体主義は、閉鎖的かつ反理性的になるのであり、全体主義の原理である不安が、結果として詭弁家の特性である反理性へと結びつく由縁であると言えるだろう。

### c) 普遍的に潜伏する不可解なもの

ヤスパースは、全体主義とは、ギリシア神話における自在に姿を変える海神、プロテウス Proteus (PuW S.76: in IKT, VWZ S.55) であると称したり、また「全体主義は共産主義でも、ファシズムでも、国家社会主義でもなく、むしろあらゆるこうした形態の内に登場するものなのである Der Totalitarismus ist nicht Kommunismus, nicht Faschismus, nicht Nationalsozialismus, sondern ist in allen diesen Gestalten aufgetreten (PuW S.77: in IKT)」と称したりしている。

上記のことから、普遍的に潜伏する不可解なものという特性は、詭弁家と全体主義それぞれ

れ共通のものであると言える。

以上、第2章において、ニヒリズムから悟性信仰へと墮落していった人間が、自分の内なる真理への超越を放棄し、その真理からの逃避として現存在秩序を作り上げたが、それによって、大衆化した人間は、詭弁家というニヒリズムと一体化した非真理的なものへと成り下がり、その詭弁家が統治する全体主義によって、人間が非真理的なものに支配される事態に陥ることについて、詳説した。

以上の第1章・第2章を振り返ってみればわかる通り、自分の内なる真理に対峙し闘争することの意義を、我々は理解することができただろう。

次章第3章では、ヤスパースの考えるあるべき真理の超越を示すことで、本稿の目的である哲学することの必要性と、その哲学する際に発生する苦悩の意義について説いていきたい。

### 第3章 ヤスパースの考えるあるべき真理への超越—自由と権威*Autorität*の関係を踏まえて

本章では、『自由と権威』、『真理・自由・平和*Wahrheit, Freiheit und Friede*』等を主な資料として用いながら詳説していく。

人間は、あるべき自分の自由に基づいて、目指すべき権威、すなわち自分の内なる真理へと向かっていくべきであると、ヤスパースは主張するわけだが、果たしてどのようなものなのか。

ヤスパース哲学において、自由とは、二律背反という限界状況の中で、無限なるものの支えであり、真の権威である超越者、さらに言い換えれば、自分の内なる真理を見出し、それに向かつて、あれか—これかの選択でもって、自己責任を伴う形で決断し、行動することであるとされる。この自由において重要な点としては、自分の力で超越者、すなわち自分の内なる真理を見出し、その真理に向かつて超越することである。それを怠ってしまうと、自分の目指すべき自分の内なる真理がわからないまま、恣意的に行動するようになり、結果として、自分の自由意志を放棄して全体主義に帰依することになる、「自由の転倒*Verkehrung der Freiheit* (GSZ S.152)」が発生してしまうのだ。またその自由の転倒が一度発生すると、一方の自由だけが強調される「恣意*Willkür* (PuW S.41: in FA)」に転倒し、また他方の権威だけが強調される「恐怖政治*Terror* (PuW S.41: in FA)」に転倒することにもつながっていくと言えるだろう。

そのため、「自由とは、自由が従うところの権威によってのみ、内実豊かである。権威とは、自由が覚醒することを通してのみ、真なるものである*Freiheit ist nur gehaltvoll durch Autorität, der sie folgt. Autorität ist nur wahr durch Erwecken der Freiheit* (PuW S.45: in FA)」というように、自由と権威が相互に依存しながら、相互に影響を与えて緊張しあう関係にあるものだという理性的な理解が、今日の我々人間にとって、必要なことであると

言えよう。

ちなみに、理性Vernunftとは、斎藤の言葉を使って前述した通り、結合と分離の性質を持つ愛の作用を理性でもって、実際に他者に対して実行していき、それでもって他者とともに自分の内なる真理を求めて交わりながら、真理へと超越していく能力のことであった。その理性でもって、分け隔てなくあらゆる他者の見解を聞き取るvernehmen交わりを行いながら、その中で自他の見解の違いを峻別し、その中で自分の内なる真理を見出して我が物にしていくaneignenことこそ、ヤスパースの考えるあるべき真理への超越である。

そうした哲学する行為が、結果現実のものとなる例として、ヤスパースはそれを自らの政治哲学の内に見出している。ヤスパースは次のように述べる。

第一に、いかなる外的な平和も、内的な平和を保つことなしには存在しない。第二に、平和は、自由によってのみ存在する。第三に、自由は真理によってのみ存在する。

Erstens: Kein äußerer Friede ist ohne den inneren Frieden der Menschen zu halten.  
Zweitens: Friede ist allein durch Freiheit. Drittens: Freiheit ist allein durch Wahrheit  
(WFF S.10)

斎藤はこれを真理→自由→内的平和（国内における平和）→外的平和（世界平和）と定義したわけだが<sup>19</sup>、このように、あるべき政治の姿を根源的に探究する行為は、同時に自分の内なる真理を根源的に探究する哲学する行為と同一のものと言える。そのようにして、根源的に哲学する行為が、政治においても、結果世界平和という真理を現世の内を実現することができるのだ。

以上の通り、ヤスパースのあるべき真理への超越とは、悟性信仰を廃し、自らの自由意志でもって、超越者すなわち自分の内なる真理を見出し、その実現を目指して理性的に哲学することであった。

しかし、「まさに人間が自分の個人的な自己実現において、決して完璧でないように、人間は私的に、公的に振る舞う道徳的な存在として、もしくは歴史のかつ政治的な諸機関が企画され、建築された知的にまた政治的に考える存在として、決して完璧にはなれない  
Genauso wie der Mensch in seiner individuellen Selbstverwirklichung nie vollendet ist, vermag er als moralisches Wesen, das privat und öffentlich handelt, oder als wissendes und politisch denkendes Wesen, das gesellschaftliche und politische Institutionen plant und errichtet, nie vollkommen zu sein.<sup>20</sup>」とザラムンが主張するように、我々人間は、世界の内において不完全な存在であり、その不完全な存在が哲学することを行ったとしても、その行為が即時的に政治等の分野で現実のものとしてあらわれることはないのだ。というのも、状況－内－存在である我々人間は、その限界状況の中で、超越者の暗号を受けながら苦悩

し、その暗号によって、時として人間の自由の実現が阻まれてしまうからだ。こうしたことから、哲学する行為とは、即時的に現実のものとはならず、超越者によって与えられる苦悩の暗号を同時に引き受ける中で、行っていく行為、言い換えれば、無制約的行為Unbedingte Handlung (Ph. II S.292 usw.)であると言える。

では、なぜそのようにして、超越者は、苦悩を伴う暗号 (Chiffre S.128 usw.) でもって、人間の自由の実現を阻むのか。なぜなら、その暗号とは、人間の良心Gewissen (Ph. II S.268 usw.) に訴えかけるものであり、それでもって人間に対して、反省する機会、いわゆる哲学する機会を与えながら、人間が再び真の権威である超越者へと正しく向かわせるためのものだからである。

しかし、「その良心の声は神の声ではないDes Gewissens Stimme ist nicht Gottes Stimme. (Ph. II S.272)」。むしろ、その神の声である超越者の暗号を通して、人間自身の自由意志でもって、その超越者へと向かっていかななくてはいけないのである。そのため、人間がその超越者の苦悩の暗号を引き受けた後で、超越者へと向かって哲学するかどうかについては、人間の自由意志そのものにゆだねられているのだ。

とはいえ、以上のことから、哲学する際の苦悩も自分の良心に訴えかけるものであると解釈すれば、その苦悩も有意義なものとしてとらえることができるだろう。

以上の通りに、ヤスパース哲学に即して、哲学することの意義、また哲学することに際しての苦悩の意義を見出すことができた。しかし、ただひたすらに存在を破壊するだけの暗号という「挫折の内なる存在の暗号Die Chiffre des Seins im Scheitern (Ph. II S.232)」のように、人間の良心に訴えかけるものだと解釈できないような暗号も存在する。そうした暗号と良心との関係については、紙数に限りがあるため、今後の論者の研究課題と据え置くことで、本稿の結びとしたい。

## 略号

GSZ : Karl Jaspers, *Die geistige Situation der Zeit*, 9. Abdr. der in Sommer 1932 bearb. 5. Aufl., Berlin; New York: de Gruyter, 1999

VWZ : Karl Jaspers, *Vernunft und Widernunft in unserer Zeit*, Piper, 1950

Ph. II : Karl Jaspers, *Philosophie II*, Springer-Verlag, 4Aufl, 1973

VdW : Karl Jaspers, *Von der Wahrheit*, Piper, 4.Aufl, 1991

WFF : Karl Jaspers, *Wahrheit, Freiheit und Friede*, Piper, 1958

EP : Karl Jaspers, *Einführung in die Philosophie*, Piper, 29Aufl, 2012

VE : *Vernunft und Existenz*, Serie Piper, 1973

PdW : Karl Jaspers, *Psychologie der Weltanschauungen*, Julius Springer, 1919

PuW : Karl Jaspers, *Philosophie und Welt*, Piper, 1958

IKT : Karl Jaspers, *Im Kampf mit dem Totalitarismus*, 1954; in PuW

FA : Karl Jaspers, *Freiheit und Autorität*, 1951; in PuW

## 参考文献一覧

Kurt Salamun, *Karl Jaspers, :Zweite, verbesserte und erweiterte Auflage*, Königshausen & Neumann, 2006

鈴木三郎、『ヤスパースの実存哲学』、報文社、1947年

吉村文男、『ヤスパース—人間存在の哲学』、春風社、2011年

林田新二、『ヤスパースの実存哲学』、弘文堂、1971年

拙稿「ヤスパース研究—挫折から哲学することへ」（東洋大学大学院文学研究科哲学専攻 博士前期課程2013年度修士論文）

斎藤武雄、『実存と実践』、理想社、1968年

斎藤武雄、『ヤスパースの政治哲学』、創文社、1986年

ヤスパース著、斎藤武雄訳、『真理・自由・平和』、理想社、1966年

藤田俊輔、「『現代の精神的状況』におけるヤスパース宗教哲学の端緒」、『コミュニケーション』第20号、日本ヤスパース協会、2013年

寺脇丕信、『ヤスパースの実存と政治思想』、北樹出版、1991年

<sup>1</sup> 斎藤によれば、「実存とは、真実にして現実的な人間存在のことである。…（中略）…実存することは、…（中略）…人間の本来の在り方を知り、深い信念や情念をもちつつ、真実に生きることを意志し、行動によってその本来性を実現することである。…（中略）…たとえば、上昇（超越）は同時に下降（実現）である（斎藤武雄、『実存と実践』、理想社、1968年、7頁～10頁）」と解説する。こうしたことから、人間存在の本来性である超越者へと向かって超越することは、同時に自分の内なる真理への超越を意味し、また自分の内なる真理が現世において実現することは、同時に現世に超越者があらわれることを意味するものだと言えるため、超越者と自分の内なる真理は同じ意味として扱うことができると言える。

<sup>2</sup> ヤスパースは、そのように語り、自身の哲学を政治と関連付けるような形で、哲学することの必要性を訴えかけるわけだが、そのように、ヤスパースが積極的に政治に関する著作や講演を多く発表するようになるのは、戦後においてである。戦前では、『現代の精神的状況』のまえがきにおいても、「私は当時、国家社会主義についての情報や、ファシズムについての知識でさえも、ほとんど持っていなかったIch hatte damals kaum Kenntnis vom Nationalsozialismus, etwas mehr Kunde vom Faschismus. (GSZ S.194)」とあるように、ヤスパースは、国家社会主義やファシズムの到来を予期しておらず、むしろ戦前では、ヤスパースは、政治に対しては消極的な態度をと

っていた。ではなぜ、ヤスパースは、戦後において政治に対する態度を一転させたのか。そのきっかけとしては、寺脇が、Hans Saner, *Jaspers*, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbeck bei Hamburg, 1970 を用いて指摘する通り、ヒトラー政権の圧制により、政治的・社会的な活動が何もできなかったというヤスパースの罪意識から、その責任を果たすことを目指して、彼は積極的に政治に関わっていくようになっていったということが挙げられるであろう（その詳細については、寺脇丕信、『ヤスパースの実存と政治思想』、北樹出版、1991年、165頁以下参照）。とは言え、ヤスパースの思想は、戦前・戦後問わず終始一貫しているため、本稿においても、そうしたものとして、論を展開していく。

<sup>3</sup> 鈴木三郎、『ヤスパースの実存哲学』、報文社、1947年、63頁。

<sup>4</sup> 『心理学』では、「我々は本書において、理念、精神、力、原理という言葉の主観化するという意味で用いるWir gebrauchen in diesem Buch die Worte: Idee, Geist, Kraft, Prinzip in subjektivierendem Sinne (PdW S.24.)」とあり、『理性と実存Vernunft und Existenz』以降では、「人間の思考Denkenや行動Tun、感情Fühlenを統制する理念Idee」として、精神が定義されている（Vgl. VuE S.40., VdW S.71. usw.）。しかし、同じく人間の内面性を意味するものとして何ら相違はないと考え、精神は人間の内面性という意味で用いる。

<sup>5</sup> 「『現存在 (Dasein)』そのものは、ヤスパースの場合、「わたしが現にここに存在する」という「私の現存在」のみでなく、あらゆるものが「現にここに (da)」「存在する (sein)」こと、およびそのように存在するあらゆるものを指すであろう」と吉村が解説するように（吉村文男、『ヤスパース—人間存在の哲学』、春風社、2011年、162頁）、現存在は、二重の意味で、ヤスパース哲学の中にあらわれている。その二重の意味とは、「世界の内に実在する、即物的なもの」を指して、現存在と言う場合のものと、一方で、吉村の言う「私の現存在」、いわゆる可能の実存mögliche Existenz (Vgl. Ph. II S.6 usw.) として存在する人間を指す、「包括的現存在umgreifende Dasein (Vgl. VdW S.53 usw.)」と称して、現存在と言う場合のものとの二つである。そこで本稿では、「世界の内に実在する、即物的なもの」という意味で現存在という言葉を用いることにする。

<sup>6</sup> 『心理学』における限界状況は、二律背反Antinomieに力点を置いているものと考えらるべきである。というのも、『心理学』と『哲学Philosophie』における限界状況の配列順序が、それぞれ違うからだ。『心理学』では、「現存在の二律背反的構造Die antinomische Struktur des Daseins」が冒頭に来て、次いで「苦悩Leiden」、その次に「個別的限界状況Einzelne Grenzsituation (闘争Kampf, 死Tod, 偶然Zufall, 負い目Schuld)」という順序になっている（Vgl. PdW (Inhaltübersicht) S. IXf.）。これに対して、『哲学』では、「あらゆる現存在の疑わしさと現実的なもの一般の歴史性という限界状況Die Grenzsituation der Fragwürdigkeit allen Daseins und der Geschichtlichkeit des Wirklichen überhaupt」は、『心理学』の「現存在の二律背反的構造」に当たるものだが、『哲学』の目次を見てみると、「実存の歴史的規定性という限界状況Die Grenzsituation der geschichtlichen Bestimmtheit der Existenz」に次いで、最後に置かれている（Vgl. Ph. II

(Inhaltübersicht des zweiten Bandes.) S. IX.)。

また、林田は『心理学』と『哲学』とにおける限界状況の内容はほぼ同一だが、『心理学』では精神類型としての限界状況、『哲学』では実存的意義としての限界状況というように、それぞれ力点の違いにより、限界状況の配列順序が異なっていると主張する。それについては、林田新二、『ヤスパースの実存哲学』、弘文堂、1971年、94頁～102頁を参照されたい。

<sup>7</sup> ヤスパース哲学における「殻Gehäuse」について説明は、拙稿「ヤスパース研究—挫折から哲学することへ」(東洋大学大学院文学研究科哲学専攻博士前期課程2013年度修士論文)、109頁～110頁、注1を参照されたい。

<sup>8</sup> Vgl. PdW (Inhaltübersicht.) S. X.

<sup>9</sup> 悟性信仰という言葉は、『現代の精神的状況』において、マルクス主義の社会学を批判する形で、出てくる(GSZ S.140)。しかし、ヤスパースは、『現代の精神的状況』や『現代における理性と反理性について』等の著作からも理解できるように、悟性によって認識可能な客観的なものを絶対視する考えには批判的であり、藤田もそうした科学における迷信(Aberglaube)を、ヤスパースが悟性信仰と称していると指摘する(藤田俊輔、『現代の精神的状況』におけるヤスパース宗教哲学の端緒、『コムニカチオン』第20号、日本ヤスパース協会、2013年、18頁以下参照)。こうしたことから、悟性信仰とは、悟性によって把握された客観的なものを絶対視しそれを崇拜する信仰、と定義しえると言えよう。

<sup>10</sup> 『心理学』において構築されたヤスパースの思想が『哲学』へと継承されていると考える鈴木によれば、「この秩序は絶対化され殻を結成し、合理主義によって支持される」ものだと解説する(前掲、『ヤスパースの実存哲学』、64頁)。

<sup>11</sup> ヤスパースの考える近代科学の出生については、金子武蔵、『実存理性の哲学』、弘文堂、1953年、84頁～88頁を参照。

<sup>12</sup> 金子は、ヤスパースが宗教→科学→技術という形で、悟性信仰の決定的な要因をキリスト教に見出していることは偏見であるとし、むしろ社会→技術→科学によって、西洋人の間に悟性信仰が生じたと説明する(前掲、『実存理性の哲学』、278頁～280頁を参照)。しかし、ヤスパースは個人の内面性、いわゆる精神から、金子は社会全体から悟性信仰が発生するとそれぞれ主張しているのみで、各個人の見解の相違の程度にしか思えないため、金子の批判は、的を射ていないと論者は考える。

<sup>13</sup> 前掲、『実存理性の哲学』、222頁～224頁を参照。ちなみに、上記と同じ個所にて、金子は、現存在秩序の原因を、有限づけられたものの支えである現存在に求めるのではなく、意識一般という人間の合理主義に基づく意識が原因であると主張する。しかし、ヤスパースにとって、意識一般Bewußtsein überhauptとは、人間の内面性、いわゆる精神を対象化するものであり、「こうした対象化は、我々とともに今にも現前するものであるDieses Vergegenständlichen ist mit uns jeden Augenblick gegenwärtig (VdW S.130)」。このように、意識一般を通して精神が対象化したもの

とは、現存在を指す。したがって、金子の主張する、意識一般が現存在秩序を生み出した原因という批判は確かに的を射ているが、ヤスパーズはそのこと自体自覚したうえで、その意識一般によって、現存在秩序が形成されたと主張しているように考えられるので、この金子の批判は、完璧なものとは言いがたい。

<sup>14</sup> ヤスパーズの哲学体系とは、絶対意識である愛Liebeを哲学することの根源に据えたうえで、それを中心点として、計7つの層に重層的に周辺に向かって展開することのできる体系であると、斎藤は主張する。そして、その愛の特性として、結合と分離を挙げ、その特性とは、異質な他者を求めて交わりを行うことで結合する一方で、その結合のあと、自他の同一性にとどまらず、同時に互いの自他の分離を明視することで、自己と他者の見解の相違を区別することができるとする。そして、その愛に従う形で、理性が実際に他者に働きかけて、現実の中で発揮することができるとした（以上の内容は、斎藤武雄、『ヤスパーズの政治哲学』、創文社、1986年、18頁以下を参照。特に18頁～21頁、24頁、25頁を参照せよ）。

ちなみに、斎藤が実際にヤスパーズと面会した際、上記の斎藤の主張をヤスパーズに披露したが、それに対してヤスパーズは、その斎藤の主張を大いに賛同し褒めたたえたのであった（前掲、『実存と実践』、205頁参照）。

<sup>15</sup> 日本語の訳書では、「五 自己喪失・欺瞞・不安—全体主義の原理」と、章を銘打っているが（ヤスパーズ著、斎藤武雄訳、『真理・自由・平和』、理想社、1966年、105頁）、ヤスパーズの原書にはそれが見当たらないため、これは訳者である斎藤の意向によるものであると考えられる。

<sup>16</sup> 前掲、『ヤスパーズの政治哲学』、97頁

<sup>17</sup> この不安はそれぞれ、実存的不安existentielle Angst (Ph. II S.266) などではなく、死の不安 Todesangst (Ph. II S.265) のような自己存在の消滅に対する不安である、現存在不安Daseinsangst (Ph. II S.266) であると言える。

<sup>18</sup> このように、人間が全体主義に対する不安から、結果として、全体主義の服従へと向かうのは、その人間の抱く不安が、現存在不安によるものだからであろう。

<sup>19</sup> 上記の「真理→自由→平和」という形で、自分の内なる真理を求める実存的自由から、政治的自由が実現され、政治的自由の実現から内的平和、外的平和へと進展していくとした、ヤスパーズの政治哲学を体系化したのは、ヤスパーズ本人ではなく、斎藤である。斎藤が実際にヤスパーズに面会した際、斎藤は上記の見解をヤスパーズに披露すると、ヤスパーズはそれに対して喜びとともに大いに賛同した（前掲、『実存と実践』、206頁）。なお、その斎藤が体系化したヤスパーズの政治哲学についての詳説は、前掲、『ヤスパーズの政治哲学』、34頁以下参照。

<sup>20</sup> Kurt Salamun, *Karl Jaspers, :Zweite, verbesserte und erweiterte Auflage*, Königshausen & Neumann, 2006

# **Studie über Karl Jaspers: Die Notwendigkeit, die Wahrheit zu konfrontieren und zu philosophieren, und die Bedeutung von Kampf und Leiden beim Philosophieren**

NAKAMURA, Genki

In einer Atmosphäre des Nihilismus akzeptieren wir Menschen heutzutage die Notwendigkeit, dass wir die Wahrheit konfrontieren und transzendieren müssen, also philosophieren müssen, aber wir fliehen vor ihr, weil wir den Kampf und das Leiden verabscheuen, die damit einhergehen. Stattdessen verlangen wir lieber nach dem augenblicklichen Genuss. Davor jedoch warnt Karl Jaspers wie folgt: Wenn der Mensch sich an die Flucht davor gewöhnt, die Wahrheit zu konfrontieren und zu philosophieren, dann wird der Mensch zur Masse. Die Masse schafft Sophisten, die ein mit dem Nihilismus verschmolzenes und unwahres Menschsein darstellen, das das Nichts an sich verkörpert. Dann regiert der Sophist mit Hilfe des Totalitarismus, mit dem die Masse beherrscht wird, indem er der beherrschten Masse mit Gewalt die eigene innere Wahrheit raubt, die den Menschen als Halt dient, und sie zu einem Nichts macht. Das Ziel des vorliegenden Aufsatzes ist es daher, die Notwendigkeit, die Wahrheit zu konfrontieren und zu philosophieren, und die Bedeutung von Kampf und Leiden beim Philosophieren zu erklären.